

いから、長い仕分線を1線あてるよりは、これを幾つかに区分して使用するようにした複式矢羽根式仕分線が有利である。

図-2は、複式矢羽根式仕分線の配線モデルである。矢羽根線の各ブロックは、特殊扱貨車の継送指定列車別に使用方法を決め、それぞれのブロックに該当する特殊扱貨車を集結する。あるブロックの貨車が列車組込みのため引き出されて空となれば、新たな継送指定列車に割り当て、順次回転して使用する。

分解貨車群の中の特殊扱貨車は、継送指定列車別に所定のブロックへ、その都度分解側から解放する。組成組込みのときは、組成側から入換機関車が入って該当するブロックから貨車を引き出していく。組成側の入換機関車が入線している間、分解側にいずれかのブロックに転入させるべき貨車のある場合には、いったん仮預け線または再散転線に解放し、のちに、この線から引き出して、あらためて矢羽根線の所定のブロックへ転入させる。

この複式矢羽根式仕分線を使って特殊扱貨車を継送指定列車別に区分集結すれば、組込み作業は在来の組込み作業時間のほぼ $\frac{1}{4}$ でできる。この複式矢羽根式仕分線による両面作業は、分解側作業と組成側作業との競合を避けるために一括制御する必要がある。

参考文献 原田 実著 貨車操車場及び組成駅における矢羽根型配線（高性能新型組成線）並びにその設計。

（中島禎次）

やまおようぞう 山尾庸三 天保8年長州（山口県）萩藩士の家に生まれ、若年、木戸孝允をたよって江戸に出で、同郷の村田清風の紹介で、九段の剣客斎藤弥九郎の塾生となった。

文久1年幕吏に随行し、箱館奉行の所属船でニコライエフスクへ行き、早くも外地を踏んだ。翌2年には高杉晋作、久坂玄瑞らとともに外国公使襲撃を企図して血盟書に名を連ね、この年九段坂に国学者埴次郎（保己一の四男）を*伊藤俊輔（博文）とともに襲って暗殺した。文久3年伊藤俊輔、井上聞多（馨）、野村弥吉（井上 勝）、遠藤謹助らと国禁を犯し、イギリス船に乗って密出国渡欧した。[知敵而後戦]を主張する吉田松蔭の志を継いだ。渡欧して攘夷の不可を知り、文物制度、特に工業関係の研究に意を注いだ。元治1年英・米・仏・蘭4国艦隊の馬関（下関）砲撃を聞き、伊藤俊輔と井上聞多は平和説得のため帰国したが、他は残って野村は鉱山学を、遠藤は経済学を学び、山尾は造船所に入り職工として働いた。明治3年帰国、直ちに明治新政府の民部権大丞に任ぜられた。同年工部省が創設されると工部権大丞に転じ、さらに同5年工部少輔に上った。以来明治14年まで同省にあって、工部大丞となり工学頭、測量正を兼ね、工部大輔となり、遂に工部卿に進んだ。以後参事院議員、同副議長、宮中顧問官、法制局長官、有栖川宮別当兼北白川宮別当、臨時建築局総裁などを歴任、その間子爵を授けられた。晩年文墨を楽しんでゆうゆう自適していたが、大正6・12・21死去した。

（田島 啓次郎）